



ゆめ通信

2026.5.1. No.145

発行 日本養豚事業協同組合
〒104-0033 東京都中央区新川2-1-10
八重洲早川第2ビル6階
TEL.03-6262-8990 FAX.03-6262-8991

ゆめシリーズ飼料価格の公表方法の見直しについて

—第27期における重要な方針転換のご理解のお願い—

代表理事 松村 昌雄

平素より、日本養豚事業協同組合の活動に格別のご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

当組合が取り扱う指定配合飼料「ゆめシリーズ」飼料の価格公表方法の見直しにつきまして、第27期（2026年5月開始）における重要な方針転換として、組合員の皆様にご理解を賜りたく、皆様に配信しているゆめ通信を持ちましてお伝え申し上げます。

これまで当組合では、「ゆめシリーズ」の販売価格を、ご加入いただいております組合員全員に公表してまいりました。その目的は、業界内に適正な価格水準を広く示すことで、透明性の高い市場環境を醸成するとともに、志を同じくする生産者の皆様に当組合の取り組みをご理解いただき、仲間としてご参画いただく一助とするためでした。

しかしながら、近年においては、豚事協が公表する飼料価格が、価格公表の趣旨とは異なる形で活用される事例が多々見受けられます。また、当組合が飼料メーカーと価格交渉を行う際においても、価格公表があることで交渉内容に影響を及ぼすこともままあります。このような背景を踏まえ、当組合では理事会において継続的に協議を重ねてまいりました。その結果、第130回理事会（2025年12月11日）において、価格公表のあり方を段階的に見直していく方針を決議いたしました。

まず、2026年1月から3月期の価格につきましては、従来の全国一律での公表から、地域別での公表へと変更いたしました。この変更に対しましては、組合員の皆様から特段のご意見やお問い合わせはなく、一定のご理解をいただけたものと受け止めております。

続く2026年4月から6月期につきましても、同様に地域別での価格公表を実施しました。

そして、第27期の重要な方針転換として、2026年7月から9月期以降につきましては、組合員全員への価格の公表を取りやめ、「ゆめシリーズ」をご利用いただいている組合員の皆様に対してのみ、個別に価格をご連絡する運用へと移行することを決定いたしました（第131回理事会にて決定、2026年3月12日開催）。本対応においては、対象となる組合員の皆様へ、その地域における全銘柄の価格情報を適切にお伝えしてまいります。なお、「ゆめシリーズ」の価格情報が、本来の趣旨を逸脱し、他社との価格交渉の材料として使用されている事例が確認された場合には、関係各所への注意喚起を行うとともに、そのような利用が広がらぬよう、適切な対応を講じてまいります。

本方針は、価格透明性の重視というこれまでの価値を否定するものではなく、むしろ変化する市場環境の中において、組合員の皆様にとってより実効性のある価格交渉と、持続的な供給体制を確保するためのものがございます。

第27期は、当組合にとりまして、これまでの取り組みを踏まえつつ、次の段階へと進む重要な転換期であると認識しております。本件につきましても、その一環としての判断であり、組合全体において、そして利用される組合員の利益の最大化を見据えたものでございます。組合員の皆様におかれましては、本方針の趣旨をご理解いただき、引き続き当組合の活動にご協力賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

九州支部セミナー開催

JASV口蹄疫終息記念セミナーと合同開催

九州支部セミナーを2026年2月13日（金）熊本県熊本市のKKRホテル熊本にて開催いたしました。今回はJASV口蹄疫終息記念セミナーと合同開催として、同じ会場で午前中は豚事協九州支部セミナー、午後はJASV口蹄疫終息記念セミナーという形式で行いました。豚熱をテーマにいたしました。講師は茨城県の石川貴泰氏（有石上ファーム代表取締役）と同じく茨城県の山内拓己氏（株山内養豚代表取締役）のお二方に生産者として講演いただきました。JASV口蹄疫終息記念セミナーではJASV獣医師3名の先生方が講演されました。会場には座る席がないほどの参集となり一日を通して160名ほど参加、午後はウェブ視聴も数多く参加されました。

石上ファーム：堆肥・液肥を活用した地域密着型養豚経営

茨城県鉾田市の有限会社石上ファームの取り組みについて、「養豚密集地での生き残り方～石上ファームの戦術～」というタイトルで石川貴泰氏（有石上ファーム代表取締役）の講演をいただきました。鉾田市は「日本で一番野菜をつくるまち」として知られ、農業産出額は全国上位に位置する一方、養豚においても全国有数の密集地帯であります。このような地域特性の中で、同社は環境規制や疾病リスクといった厳しい条件に直面しながらも、独自の戦略と現場力によって成長を実現してきました。

排水規制を乗り越えるための堆肥・液肥づくり

同社は創業1933年の歴史を有し、現在では母豚2650頭規模の企業養豚経営へと発展しております。複数の繁殖農場および肥育農場を展開し、生産部門に加え、輸送・環境・関連子会社による堆肥製造といった機能別組織を整備することで、効率のかつ組織的な運営体制を構築しています。

石上ファームの大きな特徴の一つが、堆肥・液肥の高度な活用による地域循環型経営です。同地域は水

質保全条例により排水規制が厳しく、糞尿の処理は経営上大きな課題となっていました。そのため、同社ではオガクズを活用した方式を採用し、大量に発生する堆肥・液肥（尿を処理して液肥化している）を地域の耕種農家へ供給する仕組みを構築しています。

肥料販売の試行錯誤

しかしながら、当初は未発酵堆肥による臭気やハエの発生など、利用農家からの評価は必ずしも高いものではありませんでした。そこで同社は発想を転換し、無料で提供していた「使ってもらう堆肥」から肥料効果の高い、「選ばれる堆肥」販売できる製品へと品質向上に舵を切ります。具体的には、取引農家へのヒアリングを実施し、含水率の高さや発酵不足、成分分析の未整備といった課題を明確化しました。

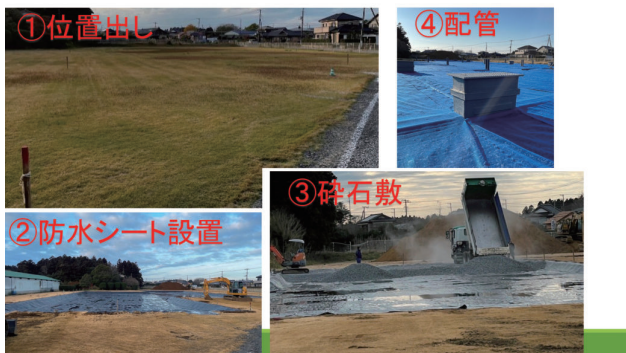


図① 有石上ファーム 堆肥発酵の工夫

その後、設備投資と試験研究を重ねた結果、含水率は63%から38%へと大幅に改善され、窒素・リン酸・カリウムの成分も安定した品質へと向上しました。これにより堆肥の有料化を実現し、現在では200戸以上の耕種農家との取引を確立、売上も着実に伸ばしております。

さらに液肥についても散布方法の工夫や設備改善を進め、処理コストの削減と付加価値化を同時に達成しています。環境対策を「コスト」から「収益源」へ転換した点は、同社の大きな強みといえるでしょう。

一方で茨城県に対して2022年12月に約1億円規模の改善計画書を提出し、主に排水処理と汚染防止の強化を図りました。茨城県内の畜産において有数の規模である同社は茨城県が推し進める霞ヶ浦水質保全条例に係る対策で何度もやりとりをして環境対策に関してとくに注力してきました。今回は既存浄化槽に膜処理設備を導入し、新たに蒸発散施設を整備することで処理能力を向上させています。また、雨水と汚水の分離を徹底するため排水マスを新設し、糞尿の流出を防ぐ構造改善を実施しました。さらに、ポンプ故障時のオーバーフロー対策や、従業員教育・設備メンテナンスの強化も計画に盛り込まれています。これに加え、液肥利用計画や作付計画、運行記録などを体系的に管理し、持続可能な糞尿処理体制の構築を目指した内容となっています。



図② (有)石上ファームの環境改善1



図③ (有)石上ファームの環境改善2

石上ファームの戦略と戦術

こうした取り組みの根底には、明確な戦略と戦術の区分があります。経営者は中長期的な方向性を示す「戦略」を担い、現場は日々の改善を積み重ねる「戦術」を実行する。この役割分担を明確にすることで、組織全体が同じ方向を向いて進む体制を構築しています。また、同社が重視するのは「強い組織づくり」

です。年2回の人事考課や1対1ミーティング、月次の全体会議や社内勉強会などを通じて、社員一人ひとりの意識向上と情報共有を徹底しています。業績や課題をオープンにし、全員で考える文化を醸成することで、現場力の底上げを図っています。さらに、同社が掲げる社員像は「会社の戦略を理解し、強い精神力を持ち、前向きに行動できる人材」であり、技術だけでなくメンタル面の重要性も強調されています。現場で実行するのは人であり、その人材育成こそが企業の競争力の源泉であるとの考えが一貫しています。

強い組織つくりの為に様々な事を実施

- ☆年2回の人事考課シートの活用と、役員と従業員の1ON1ミーティング
- ☆毎月の終業後の外部講師を呼んでの有志者会(社内勉強会)
 - 飼料、疾病、薬、財務、養豚、会社の歴史etc
- ☆毎月の全体会議
 - 業績の報告、業績手当の発表、問題点の可視化(オープンに話す)、会社の方針等
- ☆会社の年度スローガン
 - 各部署の年度目標や実施状況、生産状況等
- ☆掲示物の精査
- ☆5S活動報告
- ☆人材育成のためのディスカッション
 - 外部企業との連携による企業力アップ
 - 勤怠・労務・財務・法務などアウトソーシングできる事は進める(従業員への説明も明確に)



図④ (有)石上ファームの強い組織つくりに向けて

今後の目標と養豚業界の魅力と可能性

今後の目標としては、母豚当たり出荷頭数の向上や組織力のさらなる強化を掲げるとともに、将来的な大規模集約化への備えとして財務体質の強化にも取り組んでいます。「形にこだわらず利益を積み上げる養豚」という理念のもと、強みとしている組織力を生かし現実的かつ持続可能な経営を追求しています。講演の最後に石川氏は、養豚業界の魅力と可能性について強く言及されました。多くの困難がある一方で、仲間とともに乗り越え、学び合うことで道は必ず開けると述べています。そして、「折れない心」と「生き抜くこと」の重要性を強調し、業界全体での情報共有と連携の必要性を呼びかけました。

山内養豚：豚熱発生からの経営再開

株式会社山内養豚の代表取締役・山内拓己氏による講演内容をもとに、農場経営の実態と豚熱発生時の対応、そして再建までの歩みについて講演いただきました。

山内氏は幼少期より海外での生活経験を持ち、父が日本とオーストラリアでの養豚場経営をするなか

で、オーストラリアでの就学を経て帰国後、父の急逝をきっかけに25歳という若さで経営を引き継ぎました（現在は日本での養豚経営のみ）。異なる環境で培った経験と柔軟な視点を背景に、現在に至るまで農場経営を担っておられます。

農場は茨城県かすみがうら市に位置し、母豚210頭規模の一貫経営を行っています。生産方式はスリーセブンを採用し、年間離乳頭数は母豚当たり34.2頭と高い生産性を維持しております。また、哺乳中事故率3.15%、離乳後事故率3%と、安定した管理水準を実現している点も特徴的です。種豚にはTopigs Norsvinを導入し、少人数体制ながら効率的な運営を行っています（2025年成績、豚熱再開後）。

豚熱発生の経緯

2023年2月28日、山内農場は国内86例目となる豚熱の発生に直面しました。発生当日は、従業員からの異常報告を受け、明らかに他の畜舎と異なる状況を確認。パイルアップや皮膚症状などから疾病の可能性を疑い、速やかに家畜保健衛生所へ連絡を行いました。

翌3月1日には豚熱が確定し、その日のうちに殺処分が開始されました。確定の一報を聞き、農場に到着してからわずか数時間で全頭殺処分という厳しい現実と直面することとなり、現場には大きな衝撃と精神的負担が伴ったことは想像に難くありません。

その後、3月4日には全頭の殺処分が完了。通常であれば長期間の停滞も考えられる状況の中、山内氏は「1日だけ休み、すぐに再稼働へ向けて動き出す」という決断を下されました。この迅速な判断と行動力こそが、再建への第一歩であったといえるでしょう。

図⑤の赤枠が示す部分が公道となっており、農場に出入りする人、車両と農場に関係のない人の往来がこの公道で交差してしまう環境でした。また周囲にはイノシシが農場のすぐそばまできている痕跡があり、ウイルスは農場のすぐ目の前に存在していた可能性が高い状態でした。この交差がウイルスの農場への侵入をもたらした可能性が高いと説明されました。

豚熱発生時の農場での写真や動画を数多く講演中に公開いただきました。殺処分が進んでいく様子を見た多くの参加者たちは「同じようなことを繰り返してはいけない」と感じ、その厳しい状況が率直に

語られたことに対し、深い共感と敬意が寄せられるとともに、包み隠さず経験を共有された山内氏の姿勢に対して称賛の声が多く聞かれました。



図⑤ (株)山内養豚地図（赤枠の部分が公道）

再建を振り返って

再建は決して容易なものではありませんでしたが、同年10月には再導入を実現し、さらに2024年12月には初出荷に至っています。この約1年半の歩みは、現場の努力と強い意志の積み重ねによる成果であり、非常に示唆に富む事例といえます。前述の好成績はよりバイオセキュリティを強化して徹底した結果であります。

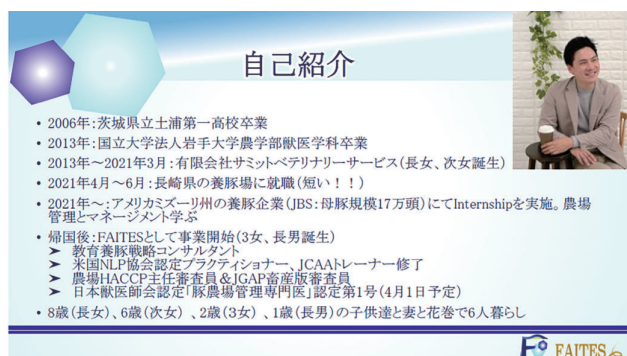
本講演の中で強く印象的であったのは、「異常を感じた時点での初動対応の重要性」と「最終的にはお金」であります。疾病発生時においては、迷いが被害拡大につながる可能性が高く、早期の通報が極めて重要であることが改めて示されました。そして再開していく中で資金力の大切さが語られました。全頭殺処分される中で補償はされますが、当然すぐ補填されるわけではない中で（現在はすぐ無利子で融資していただけるクイック融資があります。詳細は農林水産省ホームページにてご確認ください）、農場は収入源を失います。しかし従業員の雇用、固定費の支払い、返済などやりくりが非常に苦しかったと強調されました。

山内氏の取り組みは、単なる一農場の事例にとどまらず、今後の養豚経営における危機対応の指針となるものです。疾病リスクが常に存在する中で、いかに迅速に対応し、経営者として落ち着いた資金繰りでいかに再建へとつなげるか。その実践例として、多くの示唆を与える内容でありました。

沖縄支部セミナー開催

九州支部セミナーを2026年2月13日（金）沖縄県那覇市の八汐荘にて開催いたしました。今回は生産者事例発表としては山形県・五十嵐一春氏（㈱五十嵐ファーム代表取締役）に「五十嵐ファームの循環型農業経営」と題して講演いただきました。こちらの内容に関しては先日行われた北海道支部セミナーと同じ内容となっております（ゆめ通信143号を参照ください）。

また沖縄県の抱える問題を現場から見つめなおす企画として、渡部佑悟先生（FAITES代表獣医師）に、セミナー前日に沖縄支部長である嘉数雅人氏の農場、㈱農業生産法人嘉数ファームを「疑似コンサルティング」していただき、一日かけて分析していただきました。講演内容はその疑似コンサルティングから見えてきた農場現場の改善提案と、沖縄の長い暑熱期間に対しての対策についてご説明いただきました。渡部先生は2022年開業の若手管理獣医師で、国内での養豚獣医コンサルティングに従事した後に、アメリカでのインターンシップを得て独立され日米での知識と経験を生かしたコンサルティングに定評があります（図①参照）。



図① FAITES代表渡部佑悟先生

FAITESの基本的な3つのポリシー

嘉数ファームの一日疑似コンサルティングの様子をお伝えする前に、FAITESが日頃から大事にしている3つのポリシーについてご紹介します。

第一に、獣医師は病気だけを診る存在ではなく、農場マネジメントに積極的に関わるべきであるとい

う考え方です。アメリカ研修時に伝えられた言葉「Disease Vet is Dead, Management!」、これは単に病気を治療するだけでは農場は良くならず、繁殖成績、損失、作業効率、人材教育まで含めて総合的に管理していくことが重要だという意味です。第二に、獣医師が従業員教育やチームづくりに関わる重要性です。農場成績は設備や飼料だけで決まるものではなく、現場で働く人の理解と行動の積み重ねによって大きく左右されます。第三に、自分、そして手の届く人を幸せにするという姿勢であり、「Pay forward（恩送り）」の精神が重要です。これは、知識や支援を独り占めせず、周囲へつないでいく姿勢の大切さを示しています。

今回の訪問の4つの要点

① 長期的改善：遺伝能力発揮へのポイント

嘉数ファームの疑似コンサルティングにおいて、最初にご指摘しておきたいのは、候補豚の遺伝的能力のレベルアップについてです。優れた遺伝能力を持つ系統であっても、その能力を実際に発揮させるためには、種豚候補豚の個体選抜と適切な育成管理が不可欠であるという点です。沖縄の暑熱ストレス環境においても、管理次第では嘉数ファームで主に飼養されているハイポーで年間平均11.5頭離乳が可能で、種豚候補豚の選抜基準のポイントとしては、育成体重、離乳時体重、各段階の増体を重視していくことです。種豚導入時点で小さすぎる、発育が遅れる、育成のばらつきが大きいといった問題を見逃してしまうと、その影響は初産だけでなく、その後の産歴全体に及ぶ可能性があります。生時体重が小さく生まれた個体をそのまま更新豚として用い続けると、次世代にも小さい子豚が生まれやすくなり、結果として哺乳中事故率、離乳時体重、育成成績、さらには出荷成績にまで悪影響が連鎖するおそれがあります。ある文献によると、生時体重が低い群ほど、哺乳中事故率が高く、離乳時体重が軽く、63日齢時点の体重も小さい結果で、生時体重が大きい群では

表 生時体重が事故率、移動時体重、出荷時体重に与える影響

生時体重 (kg)	実験頭数	哺乳中事故率	離乳時体重 (21日齢)	出荷時体重 (63日齢)
0.45 ~ 0.675	2549	77.99%	3.7	16.5
0.675 ~ 0.855	5908	32.30%	4.4	18.6
0.9 ~ 1.08	11741	14.90%	5.2	20.8
1.125 ~ 1.305	17518	8.68%	5.9	22.6
1.35 ~ 1.53	17001	6.11%	6.6	24.2
1.575 ~ 1.755	11418	4.86%	7.1	25.6
1.8 ~ 1.98	4623	4.20%	7.6	26.5
2.025 ~	1441	3.33%	8.1	27.7

※総数は72199頭
 赤字はP≤0.05で有意差が見られた (G. Krahn 2021)

図② 生時体重とその後の推移
表 離乳時体重が事故率、移動時体重、出荷時体重に与える影響

離乳時体重 (kg)	実験頭数	離乳舎事故率	移動時体重 (61日齢)	出荷時体重 (168日齢)
2.25 ~ 3.15	601	25.91%	16.4	115.6
3.15 ~ 3.6	797	11.07%	17.6	116.0
3.6 ~ 4.05	1341	6.12%	18.0	121.0
4.05 ~ 4.5	2200	4.23%	19.5	121.7
4.5 ~ 4.95	3054	3.59%	20.5	125.7
4.95 ~ 5.4	4203	2.57%	21.5	127.7
5.4 ~ 5.85	5125	2.03%	22.6	131.5
5.85 ~ 6.3	5591	1.86%	23.6	136.2
6.3 ~ 6.75	4921	1.78%	24.7	138.9
6.75 ~	9353	1.42%	26.4	140.0

※総数は37186頭
 赤字はP≤0.05で有意差が見られた (G. Krahn 2021)

図③ 離乳時体重とその後の推移

事故率が大幅に下がり、その後の発育も良好になるデータが得られています (図②③参照)。

産子数の数値を示した研究では、初回産子数が10頭以下の母豚群はその後の産歴で多く産む可能性が低いことが示されています。一方で、初産時の成績が高い母豚群は2産目で一時的に産子数が下がったとしても、それ以降では産子数を増やし、生涯産子数は多くなることが示されています。初産で極端に産子数が少ない母豚は、その後の産時でも平均が下回る可能性が高いため、更新・淘汰の判断材料となります。逆に初産で好成績を残した母豚も、その後の管理を誤れば成績低下につながるため、栄養、健康状態、授乳負担への配慮が必要になります。

判断は常に経済効果のみを提案

こうした対応の経済的効果についても注目する必要があります。損失や作業コストをできるだけ具体的な金額で考えておくことが重要です。例えばワクチン接種であれば、薬剤費だけでなく作業時間当たりの人件費を合わせて考えるべきです。これは現場

で非常に大切な視点です。事故率の改善、離乳頭数の増加、発育改善は、単に「成績が良くなった」で終わる話ではなく、1頭いくらの価値として農場収益にどう反映されるかまで落とし込んで考える必要があります。

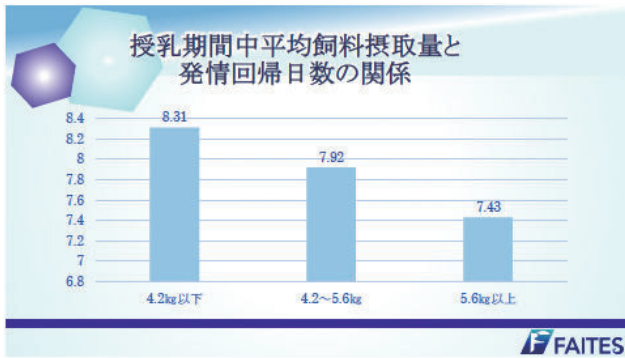
今回のコンサルティングから得られた改善策への対応によって1母豚当たり年間離乳頭数が1.5頭増加すると仮定した場合、年間分娩回数624回の農場では936頭の離乳頭数増加となり、これらのうち842頭が肉豚出荷 (80kg：枝肉価格500円と仮定) に繋がるとすれば、農場は年間3368万円の売上増加に繋がると試算できます。(出荷1頭当たり40,000円の売上と簡易計算) これはあまりにも単純化した計算式なので、実際には農場毎の実数に合わせながら売上ではなく利益分として計算していくことが重要です。

② 中期的改善：夏場対策の強化

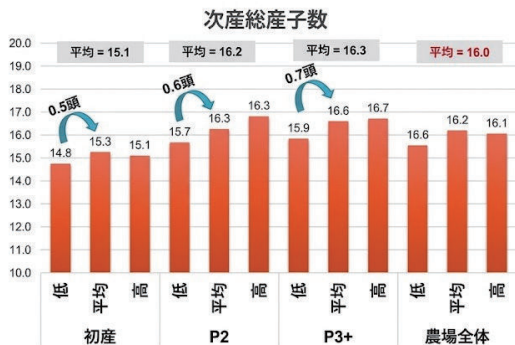
夏の暑さによる影響は、その場限りの一時的な問題ではなく、半年以上にわたり繁殖成績へ影響可能性があるという点で重大です。これは単に暑い時期に分娩が悪くなるという話ではなく、夏に受けた暑熱ストレスが、後の繁殖成績に時間差で現れてくることを意味しています。繁殖豚に対する暑熱の影響として、妊娠初期では不受胎、妊娠中期では産子数減少、妊娠後期では死産増加が起こり得ます。半年以上で「夏の影響」が見られ、6月から夏場の高温にさらされた母豚群の影響が、7月、8月、9月だけでなく、10月、11月、12月、さらには年明けまで尾を引く可能性があるということです。つまり、夏場対策は「暑い日をしのぐための応急措置」ではなく、秋以降の繁殖成績を守るための先行投資として捉える必要があります。

分娩舎の暑熱は、まず食下量を奪う

分娩舎の母豚は室温が23℃を1度上回るごとに、飼料摂取量が約150g減少するというデータがあります (諸論文あり)。この考え方でいけば、たとえば室温が30℃になると、23℃より7℃高く1050gの食下量減少となります。実際30℃の環境では1kg以上の食下量減少、35℃環境では1.8kgの食下量減少という実データもあります。授乳中の母豚にとって、この食



図④ 授乳期摂取量と発情回帰日数相関図



図⑤ 授乳期摂取量と総産子数相関図

下量低下は極めて深刻です。なぜなら、授乳期の母豚は維持に加えて母乳を出すために非常に高い栄養が要求されますので、そこから1kg、あるいは1.8kgも食べられなくなれば、体の蓄えを削って乳生産を支えるしかなくなるからです。その結果、母豚は体重や背脂肪を大きく減らし、離乳時のボディコンディションは痩せすぎになってしまいます。その結果、図④⑤のように悪影響は次の繁殖にまで及びます。

特に低産歴母豚は食下量が低くなりやすいため、夏場は単に量を食べさせるだけでなく、飼料の栄養密度を上げて必要栄養を確保するという考え方が大切になります。「夏だけ栄養価を足す」ことも有効で、暑熱期の栄養設計は平常時と分けて考えなければなりません。

母豚の体温を直接下げる発想が必要

「母豚の体温を直接下げる方法」も重要です。冷水浣腸は熱中症などの緊急場面で使う対応ですが、重度の暑熱では単なる送風や散水だけではなく、積極的に体温そのものを下げる意識が求められます。一方で、より恒常的な対策として紹介したいのが、母



図⑥ 母豚用冷房の紹介

豚用冷房の活用です。送風ダクトを用い、母豚に農業用エアコンの冷気を届ける仕組みを実施している農場があります(図⑥参照)。分娩柵4頭分の間隔ごとにミスト噴霧器を加え、気化熱と送風によってさらに涼しさを得るという工夫をしている農場もあります。ただし、ここでの注意点は風の向きが分娩柵内の哺乳豚に直接当たらないようにすることです。エアコン1台で30頭を冷やせるため、安価ではないものの、まったく非現実的な設備投資ではありません。もちろん、農場ごとに豚舎構造や規模、電力事情、既存設備の状況は異なりますので、すべての農場にそのまま当てはまるわけではありません。しかし大切なのは、「巨大な最新設備がなければ夏場対策はできない」と考えるのではなく、既存豚舎でもダクト、ミスト、局所冷房、送風の組み合わせによって改善余地があると捉えることです。

夏場対策の経済効果は決して小さくない

この対応による経済的効果は夏場分娩腹の離乳頭数が1頭増加すると仮定し、夏場2.5か月間の分娩頭数が120腹であれば、120頭の離乳頭数アップとなり、これが108頭の出荷頭数増加に繋がったとすると、先程と同じ簡易計算をすれば432万円の年間当たりの経済効果として簡易計算されます。(厳密には農場毎の試算が必要です) さらに、授乳期の食下量改善によって次の分娩腹でも離乳頭数が0.6頭アップすると仮定すると、同じく120腹で60頭の増加、肉豚出荷豚が54頭増えたとすると、216万円の年間売り上げ増加に繋がります。つまり、当年夏の分娩だけでなく、その次の成績改善まで含めて考えれば、効果は一段と大きくなります。

③ 短期的改善：スス病早期対応

スス病は、皮膚の状態が悪化し、黒っぽく汚れたように見えることから現場でそう呼ばれることがありますが、問題は見た目だけではなくありません。重症例では発育不良に繋がり、淘汰頭数増加に繋がります。スス病発症豚を見つけた段階で治療し、体表消毒も含めて丁寧に対応すること、同時に候補豚への馴致の実施で早期に改善を提案しました。

費用対効果は感覚ではなく数字で考える

農場経営では、改善案ごとに「何円かかるのか」「どの数字がどれだけ改善すれば回収できるのか」を見える化をすることが重要です。感覚ではなく数字で整理することで、現場の納得感も高まり、継続的な取り組みにつながります。（講演ではアメリカで得た知見を基にFAITES独自のソフトで費用対効果の検証方法が説明されました。）

④ その他改善：経口黄体ホルモンによる発情同期化

次に紹介されたのが、経口黄体ホルモン製剤の使用です。商品名ではSwineMateやMatrix、Regumateといった製品があり、主な目的は発情同期化で、候補豚で14日以上経口投与を行い、投与中止後5～6日で発情をそろえる方法です。離乳母豚でも、離乳当日から毎日経口投与している間は発情を遅らせ、投与中止後4～6日程度で発情をそろえることができます。この技術により、特に繁殖計画が崩れやすい夏場でも高いレベルで発情同期を実現でき、受胎率の向上につながります。候補豚では初回種付けタイミングをそろえやすくなり、離乳後母豚ではグループ調整や大幅に痩せてしまった個体への適切な種付けタイミングの調整が可能となります。この対応による経済効果は、離乳後母豚の発情同期化により種付けまでの期間が1週間延長するコストが増加しますが、次の分娩腹で離乳頭数が増加することにより、まずまずの費用対効果が得られると結論づけられます。

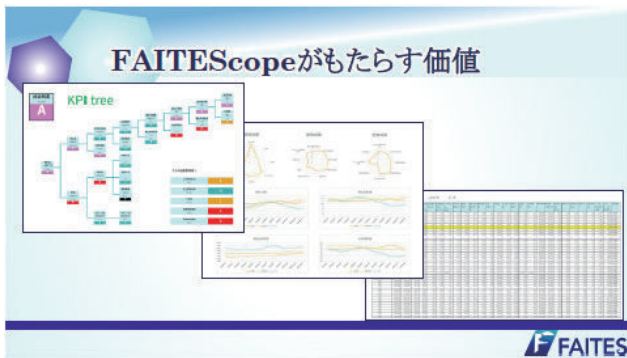
従業員トレーニングは「答えを教える」より「答えを引き出す」

最後に、従業員トレーニングの考え方です。

FAITESの従業員トレーニングは、「知識」そのものよりも「答えを出すこと」に重きを置き、言われたことだけをやる従業員から、考えて行動する従業員への転換を支援することを目的としています。具体的には、「人は自ら出した答えは忘れにくく、正しいと認識して実行する」という原理に沿って、「答えを直接与えない」「従業員が自分で答えを導く手助けをする」という事を徹底していきます。マニュアルを渡して終わり、注意して終わりでは、人はなかなか変わりません。しかし、自分で考え、自分で納得して導いた行動は、継続しやすく、現場にも定着しやすくなります。農場成績は、結局のところ日々の小さな判断と作業の積み重ねで決まります。だからこそ、設備や技術だけでなく、一人ひとりが考えて動ける組織づくりが欠かせません。

FAITEScopeが目指す、見える化と農場間交流の新しいかたち

FAITESの新規事業の「FAITEScope」について紹介します。農場データ管理の手法にはいくつかの種類があります。たとえば農場内の生産データ管理ソフトウェアとしてはPoker、PigCHAMP、PICSなどがあり、また農場間比較の方法としては種豚会社や様々な団体によるベンチマーキングが存在します。その中でFAITEScopeが追求したのは、参加の農場中の優秀農場の生産指標レベルのわかりやすさ、最終結果が一目でわかる視認性、そして農場間コミュニケーションの提供です。FAITEScopeの特徴として、匿名性、分かりやすさ、コミュニケーションの三つが挙げられます。農場間比較は有益である一方、成績を他者に知られることへの抵抗感も大きく、そこが参加の障壁になりやすい面があります。FAITEScopeでは匿名性を確保することで、参加しやすさを担保しながら、必要な農場間比較ができる仕組みを目指しています。一方で、ただ匿名にするだけでは意味がありません。自農場において何が悪いのかわからなければ改善につながらないため、視認性の高い資料、図表の整理によって、改善点が直感的にわかるよう工夫されている点も特徴です。実際、資料にはKPI treeや、ステージごとの傾向・推移を示した図、農場ごとの可視化資料、ベンチマー



図⑦ FAITEScopeの例

キングー一覧表などが用意されています。たとえば、繁殖、分娩、哺乳、離乳、肥育といった各ステージで指標を分けて見れば、「総産子数は悪くないが離乳前事故が高い」「離乳頭数は良いが母豚回転が悪い」といった、成績のボトルネックが明確になります。つまりFAITEScopeは、農場の数字をただ保存するのではなく、改善の優先順位を見つけるための道具として機能しようとしているのです。さらに興味深いのは、FAITEScopeが単なる比較ツールで終わらず、農場間コミュニケーションの場を用意しようとしている点です。「FAITEScopeの価値をさらに引き出すプラスワン」として、気になる農場への直接問い合わせ機能、すなわち“FAITEScopeチャット”への参加が任意で設けられます。ここでは匿名で農場間の情報交換ができ、共通の“物差し”としてのFAITEScopeを使いながら、具体的な相談や質問ができるように構想されています。この点は、従来のベンチマーキングにはあまりない価値だと感じています。数字だけ見ても、「なぜその農場はその成績を出せているのか」はわかりません。ところが、匿名性を保ったままでも、「その指標を改善するために何をしたのか」「どんな失敗があったのか」といった現場の知見を交換できれば、数字に背景が宿ります。しかも、FAITESが管理人となり、情報の正確性や関連文献も紹介できます。農場間交流は有益である一方、経験談だけが独り歩きしてしまう危険もありますが、そこに仲介役としてFAITESが入り、整理し、必要に応じて文献的裏付けも示せるのであれば、質の高い情報交換の場になるでしょう。FAITESの事業は、FAITES Training、FAITES Management、FAITEScopeが三本柱です。すなわち、人材育成、

戦略コンサルティング、そして農場間成績比較と交流サイトです。従業員が育たなければ改善は現場に定着せず、戦略がなければ改善の方向性が定まらず、データ比較がなければ現在地も改善余地も見えません。FAITEScopeは、この三本柱の中で、農場改善を数字で支え、さらに農場同士をつなぐ役割を担う事業として位置づけられているのです。

また、当面の間はFAITEScopeおよびチャット参加費を無料とする方針です。農場データの比較や交流は、興味があっても一歩踏み出しにくい分野ですが、費用面のハードルを下げることで参加しやすく、より広いネットワークを築こうとしている点も特徴の一つです。FAITEScopeは単なる新サービスではなく、FAITES自身がこれまでの支援を見直したうえで到達した、一つの答えでもあるのです。

今回の渡部先生の講演は、疾病、繁殖、経済、人材という一見別々のテーマが、実はすべて農場成績向上という一つの目的でつながっていることを改めて感じさせる内容でした。また、FAITEScopeはまさに、農場データを集め、見える化し、比較し、学び合う、農場にとっての“地図”をつくる試みであり、今後の展開が大いに注目される内容でした。

図⑧ FAITES代表 渡部佑悟先生

第26期女性部セミナーご報告

女性部長 稲吉 幹子

令和8年2月8日、9日に東京にて26期の女性部セミナーを行いました。この日の東京は大寒波の予報で朝から雪が降り、雪景色の中での開催となりました。

一日目はエクシュタイン・スワイン・サービス代表の宮下マリ先生に『ブタ目線で管理しよう！女性だからこそできるブタファーストの養豚とは』と題してご講演していただきました。現場経験に裏打ちされたお話はどれも実践的で、参加者からは事前に寄せられた質問が次々と投げかけられました。飼養環境の整え方、疾病予防、日々の観察のポイントなど、どれも現場で直面するリアルな課題ばかりで勉強になりました。宮下先生は一つひとつに丁寧に答えながら、女性ならではの鋭い観察眼が必要だと語っていただきました。女性の視点が現場の改善につながることを改めて実感する時間になりました。懇親会では、参加者同士の距離が一気に縮まり、温かな灯りの中で交わされる会話は、現場の悩みから未来の展望まで話題は尽きません。宮下先生による専門性の高い学びの場が、人と人をつなぐ場へと自然に変わっていくのを感じました。

二日目は一転して“食の学び”がテーマとなりました。ミシュラン一つ星「レストランラフィナージュ」オーナーシェフである高良康之シェフから、豚肉料理の魅力と調理のコツを教わる特別講習が行われました。コロナ禍の間、女性部では高良シェフのオン

ライン料理セミナーを開催したことがあります。しかし画面越しでは香りも味も伝わらず、「きっとおいしいのだろうな」と想像するしかありませんでした。だからこそ、今回の対面での料理講習は心待ちにしていた時間でした。

講習では、参加者が二人一組になり、実際に豚肉料理を作ってみる実習形式でした。シェフの手元を真似しながら、火加減や調味のタイミングを確かめ合い、協力しながら仕上げていく時間はとても充実していました。盛り付けはシェフのように美しくとはいきませんでしたが、まずまずの出来栄で、試食したときの「おいしい」という声が自然と笑顔を誘いました。豚肉の新しい魅力に触れ、家庭でも再現してみたいという気持ちが一層強まりました。帰宅後、私はさっそく“おさらい会”と称して家で料理を再現してみました。家族にも好評で、豚肉料理のレパートリーが増えたことが嬉しい収穫となりました。

雪の東京で過ごした二日間は、知識だけでなく、人とのつながり、そして食の楽しさまで広がる豊かな時間になりました。ここで得た学びと仲間との出会いが、これからの現場と日々の暮らしに確かな力を与えてくれると感じています。



講演いただいた宮下マリ先生



料理教室をしていただいた高良シェフ



料理教室の様子



会場のハッピークッキング（竹橋）



料理①豚肩ロースのブランケット



料理②豚バラ肉と白菜のシャルキュティール

料理①豚肩ロースのブランケットのレシピ

材料（2人分）

- | | | |
|---|-------|---------------------|
| A | 300g | 豚肩ロース |
| | | *肉の総量に対して0.8%の塩 |
| | 適量 | サラダオイル |
| B | 25g | タマネギ（微塵切り） |
| | 1片 | ニンニク（微塵切り） |
| | 10ml | オリーブオイル（ピュア） |
| | 10g | 無塩バター |
| | 適量 | 塩 |
| C | 400ml | 水 |
| D | 100ml | 生クリーム（38%） |
| | 適量 | レモン果汁 |
| | 適量 | 塩 |
| E | 適量 | パセリ（微塵切り） |
| F | 3g | グリュイエールチーズ（すりおろした物） |
| | 適量 | 黒コショウ |

作り方

- ①Aの豚肩ロースを1切30g-40gの角に切り分ける。
- ②切り分けた豚肉をボウルに入れて水を張り、水が澄むまで血抜きをする。
- ③十分に晒したら、タオルで水気を切り、総量に対して0.8%の塩を全体にする。
- ④中火で熱したフライパンにサラダオイルを加え、③の豚肉を全体が白くなる程度に焼き、取り出す。
- ⑤鍋にBのオリーブオイルと無塩バターを加え、Bの野菜を色付けないように塩をして炒める。
- ⑥野菜に火が入ったら、④の豚肉を加え、Cの水を加えて沸騰させ、アクを取り除いて弱火にし、30分程度煮込む。
- ⑦竹串がスッと通るくらいに火が入ったら豚肉を取り出して味見をし、必要であれば塩をして乾かないようにラップで覆っておく。
- ⑨鍋の煮汁をしっかり煮詰め、Dの生クリームを加え、⑦の豚肉を戻してソースと馴染むように軽く煮立て、レモン果汁と塩で味を調える。
- 皿に盛り、Eのパセリを振って仕上げる。
- ⑩別皿にFのグリュイエールチーズを各々入れ、上から黒コショウを振り料理に添える。

**料理②豚バラ肉と白菜のシャルキュティエール
レシピ**

材料（2人分）

A	250g	豚バラ肉
	2g	塩（肉の総量に対して0.8%）
	30ml	サラダオイル
B	1/2個	ミニ白菜
	適量	塩
C	20g	無塩バター
	100g	玉葱（スライス）
	200ml	白ワイン
	80ml	水
D	1/2個分	中玉トマト（湯剥きをして種を取り角切り）
	10g	ピクルス（千切り）
	15g	ディジョンマスタード
	各適量	塩、コショウ
	適量	パセリ（みじん切）

作り方

- ①豚バラ肉に塩をして、サラダオイルを加えて熱したフライパンに入れ、中火で両面焼き色を付けるように焼き、取り出す。
- ②①のフライパンに、Bの白菜を入れて同様に両面焼いて取り出す。
- ③②のフライパンに、Cのバターを加えて玉葱を炒め、白ワインを注ぎ半量まで煮詰める。
- ④取り置いた豚バラ肉と白菜をフライパンに戻し、を加えて蓋をし、中火で5分程度煮て、再度豚バラ肉と白菜を取り出して保温する。
- ⑤煮汁を煮詰めながらトマトを加えて一煮立ちさせ、ピクルス、マスタードを加え、塩、コショウで味を調える。
- ⑥皿に切り分けた、豚バラ肉と白菜を盛り、5)のフライパンのソースを注ぎ、パセリをあしらいつつ調える。


【月刊連載】

養豚経営におけるベンチマーキング指標の活用

【第3回】

経営の羅針盤となる重要指標(KPI)の選び方と正しい定義②肥育編

 明治大学農学部農学科 専任准教授
佐々木 羊介
はじめに：利益を確定させる「出口」の成績表

第2回では、農場の生産頭数（入り口）を決める繁殖部門の重要指標について解説しました。しかし、いくら多くの子豚を離乳させても、最終的に健康な肉豚として出荷できなければ利益にはつながりません。

離乳から出荷までの「育成・肥育部門」は、養豚経営における最大のコストセンターです。生産コストの約6～7割を飼料費が占める現代において、この肥育ステージでの「効率」と「事故（ロス）」は、農場の利益率を直接左右します。第3回では、経営の最終的な成果（出口）を評価し、コストの無駄を可視化するための肥育部門の重要指標（KPI）の定義

とその注意点について解説します。

肥育部門の最重要指標：コストと成長のバランスを見極める

肥育部門の成績を評価する際も、繁殖部門と同様に「定義の統一」が不可欠です。まずはコストと発育に直結する3つの核となる指標です。

■ 各指標の定義と解説

飼料要求率（FCR：Feed Conversion Ratio）

●定義：豚の体重を1kg増加させるために必要な飼料の重量（kg）

●計算式：総飼料給与量 ÷ 総増体重量

「農場全体FCR」における見えないロスの図解

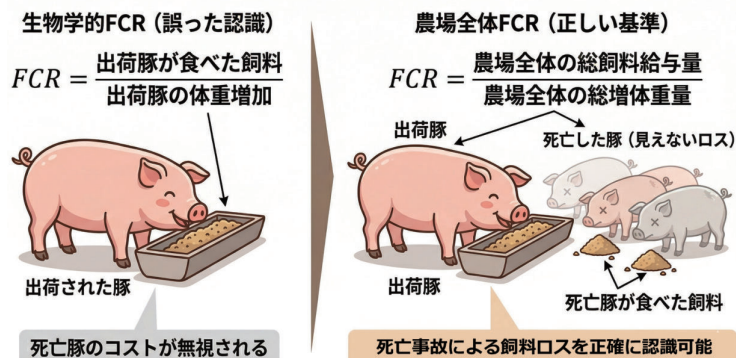


図1 飼料要求率のイメージ図

●解説と注意点：肥育部門における「燃費」を示す、コスト管理上の最重要指標です。ベンチマーキングにおける最大の注意点は、途中で死亡した豚が食べた飼料も「総飼料給与量」に含める「農場全体FCR」で計算しているかどうかです。死亡豚による「見えない飼料ロス」を正確に把握するためには、農場全体FCRの使用が不可欠です（図1）。

一日当たり増体重（ADG：Average Daily Gain）

●定義：1日あたりの平均体重増加量（g/日）

●計算式：総増体重量 ÷ 延べ飼育日数

●解説と注意点：

豚がどれだけ順調に発育しているかを示す指標です。ADGの低下は、出荷日齢の遅れ（＝豚舎の回転率低下）を招き、密飼いや新たな疾病の引き金となります。離乳から出荷までの「全期間ADG」だけでなく、豚舎の移動ステージごとに分割して算出することで、発育が停滞している期間を特定しやすくなります。

離乳後事故率（死亡率）

●定義：離乳後から出荷までの期間に死亡または淘汰された豚の割合

●計算式：（対象期間の死亡・淘汰頭数 ÷ その期間の開始時の頭数） × 100

（※全期間の事故率を出す場合は「離乳後の全死亡・淘汰頭数 ÷ 離乳頭数」、ステージごとの場合は「各舎での死亡・淘汰頭数 ÷ 各舎への導入頭数」で算出します）

●解説と注意点：出荷頭数を左右する重要な指標です。特に肥育後期での死亡は、そこまで費やした飼料代や施設稼働費のすべてが水泡に帰すため、経営へのダメージが甚大です。計算の際は、自然死だけでなく、発育不良等による「農場判断での淘汰」も必ず含める必要があります。

売上の「質」と「量」を評価する指標

コスト管理と並んで重要なのが、最終的な生産物の「価値（売上）」をいかに高めるかです。

■各指標の定義と解説

枝肉重量

●定義：出荷された豚の枝肉の1頭あたり平均重量

●計算式：枝肉総重量 ÷ 出荷頭数

●解説と注意点：1頭あたりの売上ボリュームを決定する重要な指標です。近年、豚枝肉取引規格の上限値が引き上げられたことにより、適正な肉質を維持しつつ、いかに枝肉重量を大きくして出荷するかが利益増加の鍵を握るようになりました。FCRを極端に悪化させずに、出荷体重をどこまで引き上げられるか、自社の最適な出荷タイミングを見極める必要があります。

上物率

●定義：出荷した豚のうち、格付で「上物」以上（極上・上）に評価された豚の割合

●計算式：（上物以上の頭数 ÷ 総出荷頭数） × 100

●解説と注意点：売上単価に直結する指標です。上物率を高めるには、適切な体重・背脂肪厚で出荷する「出荷精度」と、群全体のバラツキを抑える「斉一性」が求められます。前述の「枝肉重量」の引き上げとセットで考え、規格外（大貫や薄脂など）を増やさずに重量と単価の両方を追及することが求められます。なお、市場を通さず食肉業者等と直接取引を行う「相対取引」の場合、全国一律の「上物」といった明確な格付基準が存在しないケースもあります。その場合は、取引先が求める独自の規格（指定された重量範囲など）にどれだけ合致しているかを示す指標に置き換えて管理する必要があります。

農場全体の総合力を測る究極の指標

最後に、繁殖部門と肥育部門の成績を掛け合わせた、養豚経営の最終的な「総合得点」とも言える指標を紹介します。

年間母豚当たり出荷頭数（MSY：Market pigs per Sow per Year）

●定義：母豚1頭あたり1年間で出荷された肉豚の頭数

●計算式：年間総出荷頭数÷平均母豚飼養頭数

●解説と注意点：農場全体の最終的な生産効率を示す、最も根幹となるKPIです。第2回で解説した繁殖部門の指標「年間母豚当たり離乳頭数」がどれだけ高くても、肥育部門の事故率が高ければ、このMSYは低下してしまいます。逆に言えば、MSYを他農場と比較することで、自社の強み・弱みが「入り口（繁殖）」にあるのか「出口（肥育）」にあるのかを大局的に判断することができます。

計算上の重要な注意点として、肉豚として市場へ出荷した豚だけでなく、農場内で自家育成し、将来の繁殖用として母豚群へ繰り入れた更新豚（候補豚）も「出荷頭数」にカウントする必要があります。これを含めないと、自家更新を行っている農場ではMSYが実際の実力よりも低く算出されてしまうため注意が必要です。なお、このMSYは繁殖から肉豚出荷までを行う「一貫経営」の農場でのみ算出可能な指標であり、繁殖専門あるいは肥育専門の農場では単独で算出することはできません。また、一貫経営

であっても、生産した子豚の一部を外部へ販売（子豚出荷）している農場では、最終的な肉豚出荷頭数と母豚の生産成績にズレが生じるため、正確なMSYの算出が困難になります。そのような経営形態では、PSYや各ステージの生存率など、個別の指標を組み合わせることで総合力を評価する必要があります。

おわりに：生産データから経営データへ

第2回の「繁殖編」と今回の「肥育編」を通じて、養豚経営の生産現場を可視化するための主要なKPIの「定義」が出揃いました。重要なのは、これらの部門が独立しているわけではないということです。「年間母豚当たり離乳頭数」が向上して離乳頭数が増えた結果、豚舎が密飼いになり「FCRや離乳後事故率」が悪化してしまっただけでは、最終的な「MSY」は上がりません。繁殖と肥育、両方の指標を正しい定義で算出し、農場全体を俯瞰してバランスを見ることが真のデータ経営の第一歩です。

これで自社の生産現場の実態を、頭数や重量といった数値（共通言語）で把握する準備は整いました。しかし、的確な経営判断を下すためには、これらの「物理的な生産データ」が最終的にどれだけの「お金（収益とコスト）」を生み出しているのかを評価する必要があります。そこで次回の第4回では、現場のデータ活用に進む前に「KPIの経営編」として、飼料代、薬剤費、枝肉単価（売上）など、農場の財務状況と収益性を直接的に測るコスト・売上関連の重要指標について詳しく解説していきます。

オランダ養豚研修2026を終えて

事務局 加藤 大輝

日本養豚事業協同組合では、2026年1月、オランダにおいてTopigs Norsvin社の協力のもと、養豚研修ツアーを実施しました。本研修は、同社が展開する母豚系統「TN70」の遺伝的能力を最大限に活用するための管理技術、飼養システム、栄養戦略などを学ぶことを目的として企画されたものです。オランダは世界有数の養豚先進国であり、限られた国土と厳しい環境規制の中で高い生産効率を実現している国です。今回の研修では、Topigs Norsvin本社での講義、研究施設の視察、実際の養豚農場訪問、関連企業の見学などを通じて、オランダ養豚の現状とその背景にある考え方を多角的に学ぶことができました。

研修の目的

今回の研修は、「Unlock potential of Topigs Norsvin modern genetics」というテーマのもとに実施されました。これは、Topigs Norsvinの最新遺伝資源の潜在能力を引き出す、という意味です。TN70母豚の能力を十分に発揮させるためには、単に優れた遺伝資源を導入するだけではなく、それに見合った管理技術、施設、栄養設計、バイオセキュリティが不可欠であることが強調されていました。研修の主な目的は、オランダの養豚生産現場でTN70がどのように管理されているのかを実際に確認することでした。そして、母豚の寿命延長、子豚の品質向上、農場全体の効率改善にどのような考え方があるのかを学ぶことでした。今回の研修は単なる視察旅行ではなく、日本の養豚が今後さらに持続可能で競争力のある産業になるために、何を学び、何をとり入れるべきかを考える機会であったといえます。

オランダ養豚産業の概要

Topigs Norsvin本社での説明では、オランダ養豚の構造的特徴について多くの示唆がありました。オランダでは、いわゆる巨大なインテグレーション

型の生産体制が中心ではなく、独立した農場が機能的に分業しながら全体を成り立たせている点が特徴です。オランダの豚肉生産は、約63万頭の母豚を約1,000戸(社)で飼養する形で成り立っています。また、国内人口約1,800万人に対し、一人当たりの豚肉消費量は年間36.1kgとなっています。一方で、生産された豚や豚肉の66%は輸出に回っており、その主要な輸出先はとりわけ子豚については隣国ドイツとベルギーです。つまり、オランダ養豚は明らかに輸出を前提とした競争産業であり、国内需要だけでなく周辺国との価格競争・品質競争の中で成立しているといえます。

さらに印象的だったのは、母豚頭数が大きく減少しているにもかかわらず、総出荷肉量はほぼ維持されているという点です。2002年当時約110万頭の母豚数で年間母豚当たり出荷頭数23.2頭、年間母豚当たり枝肉重量2,023kgであったものが、現在(2024年数値)

オランダでの豚肉販売状況(デンボッシュ・一般スーパー)
バラ236円/100g、ロース208円/100g(185円/ユーロ)
AW認証☆1水準(一般的)



写真① オランダでの豚肉販売状況

オランダではドリップが問題になっている



写真② オランダではドリップが問題に

では約71.5万頭の母豚数で年間母豚当たり出荷頭数31.5頭、年間母豚当たり枝肉重量3,087kg（日本とと畜方法が異なり平均歩留り80%前後）にまで向上しており、総出荷肉量はほぼ水準を維持していることが示されました。このことは、単に頭数を維持することではなく、1頭当たりの生産性を高めることこそが、将来の日本養豚経営にとって重要であることを示唆しています。

Topigs Norsvin社の育種戦略

Topigs Norsvinは、世界の養豚産業において非常に大きな存在感を持つ育種会社です。中国を除く世界市場における母豚系統の市場シェアが29%に達しており、世界各地で広く採用されていることが示されました。アジア、ヨーロッパ（域内シェア1位）、アメリカ（域内シェア2位）、南米（域内シェア2位）など複数地域において高いシェアを持っていることから、その影響力の大きさがうかがえます。同社の育種の特徴は、「Balanced Breeding（バランスブリーディング）」という考え方にあります。これは、産子数だけを追うのではなく、繁殖性、成長性、飼料効率、肉質、強健性、行動特性など、多くの形質を総合的に改良していく考え方です。強健性、アニマルウェルフェア（AW）、行動面への継続的な投資が、持続可能性の向上、そして収益性の向上に結びつくと説明されました。

また、過去5年間の遺伝的改良による経済価値は、肥育豚1頭当たり1,288円と示されました。1頭当たりでは一見小さく見えるかもしれませんが、年間何千頭、何万頭と出荷する経営体においては極めて大きな差になります。しかもこの差は、一度仕組みとして導入されれば継続的に積み上がっていく性質のものであるため、経営への影響は非常に大きいと感じ

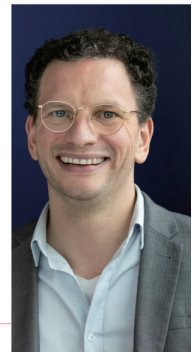
Topigs Norsvin本社研修



写真③ Topigs Norsvin本社研修の様子

Introduction 日本担当 サム氏
Sam van Boekel サム ヴァン ボークエル氏
Agricultural collage

AgriSyst (software dedicated to Pig Industry)
ソフトウェアエンジニア
Productspecialist 生産スペシャリスト
International orientated 国際部に転籍し10年動ける10 years
Topigs Norsvin
Advisor chain provability サプライチェーンアドバイザー
Area manager Japan 日本エリアの担当マネージャー



図① Topigs Norsvin日本担当サム氏

TN70 – Expected trend 期待される育種傾向

Reproduction traits

	TN70 trend / year	2024 performance	2034 performance	Difference
Live Born / litter 生存産子数	+0.14	15.7	17.1	+1.4
Number of teats 乳頭数	+0.16	16.8	18.4	+1.6
Pre weaning mortality % 離乳前事故率	-0.45	11.0	6.5	-4.5
Weaned / litter 離乳頭数	+0.18	14.1	15.9	+1.8
Birthweight, g 生時体重	+8	1400	1480	+80
Weaningweight, kg 離乳体重	0.0	8.2	8.2	0.0
Longevity, # cycles 生産可能産歴	+0.08	4.0	4.8	+0.8

24 Topigs Norsvin

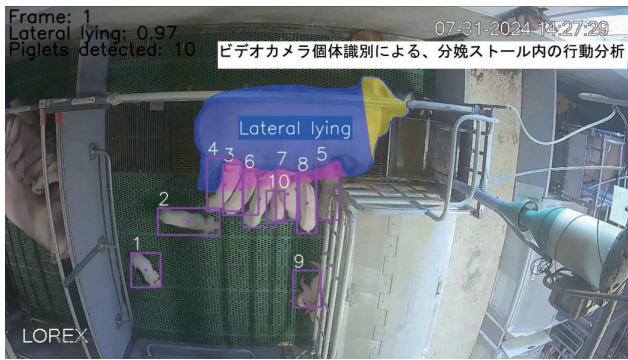
Topigs Norsvin

図② TN70の今後の育種傾向

じました。

TN70母豚の特徴と将来性

TN70の将来予測2024年から2034年比として、離乳前事故率が11.0%から6.5%へ低下し、離乳頭数が14.1頭から15.9頭へ増加し、生存産子数も15.7頭から17.1頭へ増加する見通しが示されました。さらに、乳頭数は16.8から18.4へ、生時体重は1,400gから1,480gへ、生産可能産歴は4.0産から4.8産へ向上するとの見通しが提示されました。ここで重要なのは、単に「子豚が多く生まれる」だけではなく、「事故率を下げながら、長く使える母豚にする」という方向性が明確であることです。これは、日本でも近年課題となっている事ですが、多産化に伴い生時体重が小さい子豚の増加、哺育負担の増大、母豚の消耗増といった問題に対して、解決策となる内容でした。また、TSI（母豚の系統の育種目標に遺伝的にどれだけ適合しているかという数値）が高いほど、生産性、強健性、繁殖性に関する遺伝的潜在能力が高いと説明がありました。つまり、選抜指標を単なる繁殖数値に限定せず、総合的な価値として評価する考え方が定着していることが分かります。



写真④ Topigs Norsvinの行動分析研究

候補豚育成と母豚づくりの考え方

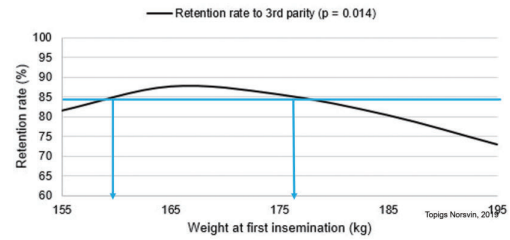
本社研修の中では、候補豚育成の考え方も非常に重要なテーマとして扱われていました。出生時から育成期、初産授乳期、2産目授乳期までの体重推移とボディコンディションの変化を踏まえた母豚づくりの重要性が示されていました。特に印象的だったのは、初回種付け時、分娩時、離乳時の3点において1個体ずつ体重増加を正確に計測したうえで、候補豚の育成を「将来の繁殖母豚としての体づくり」として捉えていた点です。すなわち、筋肉や脂肪をつけるだけでなく、ホルモン、行動、繁殖器官の発達まで含めて総合的に育てるという発想です。雄刺激や育成期の発育管理、初回交配までの準備が、その後の繁殖成績と寿命に大きく影響するという考え方は、日本でも今後より重視すべき視点だと感じました。

ヨーロッパにおけるAWの重視

ヨーロッパではAWへの対策が日々強化されており、断尾の廃止、去勢の制限、分娩ストールにおける母豚行動の自由化、飼養面積の拡大などが各国で検討されています。例えばドイツでは2035年までに分娩舎で母豚を拘束する飼養方法が大きく制限され、オランダでは2030年に断尾の禁止など検討されています。またスペインでも飼養密度の規制強化により、肥育豚生産が7~16%減少する可能性が指摘されています。Topigs Norsvinでもカナダに位置する母豚1600頭の新育種核農場「Innova Canada」において、群飼妊娠舎、フリー授乳ストール、授乳期採食量の記録などが紹介されており、将来の標準として見据えている方向性が示されていました。

1. Gilt rearing 候補豚育成

Weight at first insemination and effect on retention rate%初回交配体重による母豚の長寿性
3産までの維持率 約160kg~175kgで初回交配できた育成豚は85%以上の割合で3産以上の繁殖が出来る

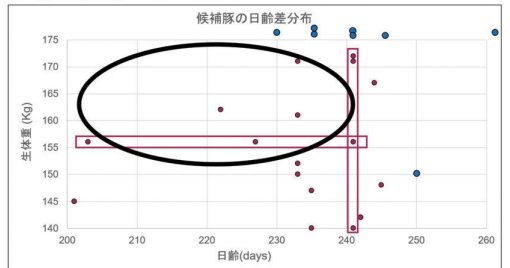


28 Topigs Norsvin

図③ 初回交配体重と3産維持率

Control the development of gilts 候補豚の発育管理

Where should be the focus at insemination? 初回交配時に何を重視するか ⇒ 生体重と日齢
240日齢以内に初回交配体重を150kg以上が望ましい



29 Topigs Norsvin

図④ 初回交配体重と日齢

1つ目の農場訪問、家族経営の農場

研修では、実際にTN70を導入している農場も訪問しました。最初にBull B.V.という母豚2,200頭の一貫経営農場を訪問しました。経営者2名（親子）、従業員6名（3名外国人）で運営していました。肥育舎2/3は別の場所にあり、同じ規模（2,200頭一貫）でもう一か所経営しています。周囲の農地を所有しており、糞尿処理も兼ねてじゃがいもを主に栽培しています。母豚はTN70で止め雄はTN tempoという品種です。tempoは肉豚の特に赤肉生産における成長能力や強健性に優れた雄であり、欧州の商業生産で広く採用されている系統です。飼料はリキッドフーディングシステムを採用していました。設備は30年ほど前に建築されたもので、古い施設をうまく活用している印象でした。

2つ目の農場訪問、衝撃の母豚4,000頭を8人で管理

2件目の農場訪問が、北ブラバント州ホーヘ・ミールデ村に位置するVargis B.V.です。ももとは小規模な家族経営の養豚場としてスタートしました。しかし現在では、近代的な設備を備えた大規模な養



写真⑤ 訪問農場Bull(オランダの豚舎は基本的にレンガ造り)

2026/1/13訪問 ○繁殖成績	Bull B.V.	訪問農場①Bull	繁殖成績
内容	2025年間	内容	2025年間
平均在籍母豚数	2207.8	産子数/腹	16.6
年間更新率%	49.6	初産腹の産子数	15.6
母豚死亡率(安楽死含む・年間%)	6.6	死産数/腹	1.0
母豚廃用率%	17.7	死産率%	5.5
初産種付け平均日齢	258	ミイラ胎児数/腹	0.3
初産率%	49.8	平均哺乳日数	26
初産受胎率%	94.3	離乳前死亡率%	9.6
初回交配までの日数(平均)	6.1	離乳子豚数/腹	15.0
初回交配受胎率%	31.8	サイクル指数/分産指数	2.41
受胎率%	90.6	母豚1頭当たり年間離乳子豚数	35.68

図⑤ 訪問農場①Bull繁殖成績

2026/1/13訪問 ○繁殖成績	Bull B.V.	訪問農場①Bull	繁殖成績
内容	2025年間	内容	2025年間
平均在籍母豚数	2207.8	産子数/腹	16.6
年間更新率%	49.6	初産腹の産子数	15.6
母豚死亡率(安楽死含む・年間%)	6.6	死産数/腹	1.0
母豚廃用率%	17.7	死産率%	5.5
初産種付け平均日齢	258	ミイラ胎児数/腹	0.3
初産率%	49.8	平均哺乳日数	26
初産受胎率%	94.3	離乳前死亡率%	9.6
初回交配までの日数(平均)	6.1	離乳子豚数/腹	15.0
初回交配受胎率%	31.8	サイクル指数/分産指数	2.41
受胎率%	90.6	母豚1頭当たり年間離乳子豚数	35.68

図⑥ 訪問農場①Bull肥育成績

豚企業へと発展しています。この農場を運営するファン・ギスベルゲン家は、代々養豚業に携わってきた家族です。現在のVargis農場は母豚4,000頭の繁殖専門農場であり、欧州でも比較的大規模な繁殖農場に位置づけられます。生産された子豚の主な出荷先はスペインです。

農場の経営体制は非常に効率的であり、オランダ



写真⑥ 訪問農場②Vargis農場の候補豚

人の経営者を含む3名の管理スタッフが農場全体の管理を担当しています。その下で実際の飼養管理を担うのがポーランド人労働者5名です。欧州の養豚産業では労働力不足、人件費高騰が深刻であり、東欧からの労働者に依存するケースが多く見られます。この農場でも同様の仕組みが採用されていました。興味深いのはその勤務体系です。ポーランド人従業員は4週間連続で勤務した後、4週間の休暇を取得するというサイクルで働いています。4週間オランダで集中して働き、その後4週間は母国に帰って休暇を取り、代わりにポーランドより5人別の人が交代でやってきます。

使用している遺伝子は、母豚がTopigs Norsvin社のTN70、止め雄にはTNtempoが用いられています。候補豚の導入時期についても特徴的な管理が行われていました。候補豚は育種農場から150日齢で関連農場に移動し、さらにそこで育成し、210日から240日齢前後で当農場に導入されており、その後農場内で繁殖群へと組み込まれていきます。わずか5名のポーランド人労働者が母豚4,000頭を管理していましたが、候補豚の姿は極めてそろっていました。候補豚の体形をそろえることは以後の管理に非常に重要な要素と説明され、日齢と体重を基準に到達していない個体は種付けせず、出荷するという厳格なルールがありました。その分シンプルな作業も徹底され、種付け回数は基本的に1回、里子は原則実施しない、分割授乳もしないと徹底されていました。農場は比較的新しく、洗浄が自動でできる装置があり、給餌器の分量調整のノズルの通路側の手前に配置されているなど、素早く管理できるような工夫が随所に施されていました。

また、Vargis農場では現在の規模に満足することなく、同規模の農場をさらに増設する計画が進められているとのことでした。そのため現場では次の農場の準備のため8産から10産までの母豚が存在しており、母豚更新の早いヨーロッパにおいて実際に10産まで活用できていることへの驚きもありました。

2つの農場を実際に見学して感じたのは、施設や設備の先進性だけではなく、農場全体の管理のシンプルさと統一感でした。欧州の養豚農場では、作業手順や飼養方法が非常に標準化されており、誰が作業しても同じ品質の管理ができる仕組みが整っています。従業員の国籍や経験に関わらず一定の管理レベルを維持できる体制が構築されていました。さらにVargis B.V.は単なる生産農場ではなく、認定トレーニング会社としての役割も担っています。農業分野で働く若者に対して、養豚技術や農場管理の知識を学ぶ機会を提供しており、教育機関としての機能も持っています。これはオランダの農業が単なる生産活動ではなく、次世代の人材育成にも積極的に取り組んでいることを象徴しています。優れた遺伝能力を確実に成績へ結びつけるための仕組みづくりが徹底されているともいえます。

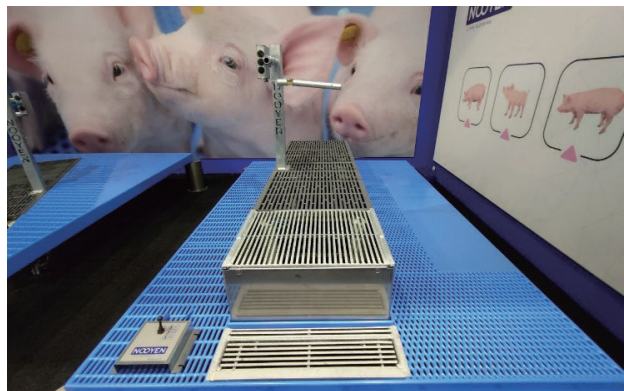
Denkavit研究所視察から学んだこと

Denkavitはオランダのプレミックスメーカーであり、研究農場をガラス越しに視察しました。研究は多岐にわたりTopigs Norsvin社もかかわっている案件も何件もあると説明されました。特に子豚栄養や初期成長に関する研究に力を入れていることがうかがえました。オランダ養豚では、育種だけで成果を語るのではなく、その能力を支える栄養設計や飼料原料の使い方、離乳前後の管理技術までを含めて一体で考えていることが印象的でした。日本でも、遺伝能力の高いシステムを導入した際に、その能力を十分に引き出せていないケースが見られますが、その背景には栄養管理や離乳前後の飼育管理技術が追いついていないことも少なくありません。その意味で、今回の視察は「育種と栄養は切り離して考えられない」という重要な項目を改めて認識する機会になりました。

デンカビット試験農場可動分娩柵、群飼育



写真⑦ Denkavit研究農場



写真⑧ Nooyen 分娩スノコ 授乳時に母豚の床面が上昇して子豚の圧死を防ぐ

Nooyen訪問

Nooyen は養豚用スノコ床のメーカーであり、現代の養豚施設に求められる衛生性、快適性、作業性を支える企業です。フリーファローイング（分娩）やフリーラクトーション（授乳）への移行が段階的に進められていることに応えるための設備の紹介や実際のスノコの製造を見学しました。日本では、まだ固定式分娩ストール中心の考え方が主流ですが、今後はヨーロッパの動きが国際基準として影響を及ぼしてくる可能性があります。その際、床材や施設構造の選択が、生産成績だけでなく、AW対応や衛生管理にも大きく関わることを理解しておく必要があると感じました。

日本の養豚への示唆

今回の研修を通じて最も強く感じたのは、オランダ養豚の強さは「特別なことをしている」点ではなく、「標準化されたことを高い精度でやり切っている」点にあるということです。日本の養豚は、個々の農場で工夫を重ねながら高い成果を出している事例も多くありますが、一方で農場ごとの差が大きく、管理

手法もばらつきやすい傾向があります。その結果、同じ系統、同じような飼料条件であっても、成績差が非常に大きくなることがあります。これに対してオランダでは、遺伝、栄養、施設、衛生、作業設計が一貫してつながっており、「再現できる仕組み」がとられていました。この点は、日本の養豚が今後さらに規模拡大や世代交代、雇用労働力の活用を進めていく上で、非常に重要な視点だと思います。また、母豚頭数が減少しても生産量を維持している事実は、日本にとっても大きな示唆です。

まとめ

今回のオランダ研修は、Topigs Norsvinの最新育種戦略を学ぶだけでなく、それを現場でどう活かすかまで含めて理解する非常に有意義な機会となりました。研修を通じて、優れた遺伝資源はそれだけで成果を生むわけではなく、適切な候補豚育成、母豚管理、栄養設計、施設整備、そして標準化された作業体系によって初めて価値を発揮することを実感しました。特に、オランダ養豚の再現性の高い仕組みづくり、母豚1頭当たりの生産性向上を重視する視点、AWと収益性を両立しようとする考え方は、日本の養豚がこれから進むべき方向を考える上で大きな示唆を与えてくれました。

今後は、今回の研修で得られた知見を単なる視察報告として終わらせるのではなく、日本の現場条件に照らし合わせながら、どの要素をどのように取り入れていくべきかを整理し、組合員の皆様と共有していくことが重要と考えております。今回の研修が参加者にとって、そして日本の養豚産業全体にとって、次の一歩を考えるきっかけになれば研修としてこれ以上ない素晴らしい成果となると信じています。



写真⑨ 今回のオランダ研修の参加者(左から、柴香代子氏(有柴畜産代表取締役)、加藤大輝(日本養豚事業協同組合事務局)、齋藤幸氏(有阿賀北ファーム代表取締役)、水野慎太郎氏(有みずの代表取締役、日本養豚事業協同組合理事)、角田栄作氏(有角田農場代表取締役、日本養豚事業協同組合理事)、山本孝徳氏(有アクティブピッグ代表取締役、日本養豚事業協同組合副理事長)、日の出物産(株)陶山航氏)

日本と真逆！鶏ムネとモモ価格



鶏モモ
(骨付き)
5.49ユーロ/kg
185円/ユーロ
の場合
101.5円/100g

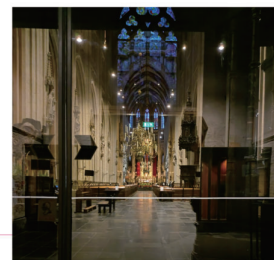


鶏ムネ
(骨抜き)
16.5ユーロ/kg
185円/ユーロ
の場合
305.2円/100g

骨付きとはいえ、ムネはモモの3倍！赤身重視であることがこれから分かります。

写真⑩ 赤身重視の価格(鶏肉)

Topigs Norsvin本社、所在は古都デン・ボッシュ街には3,400年前の建物が立ち並ぶ街を代表する建築物、聖ヤン大聖堂(1380~)



写真⑪ Topigs Norsvin本社があるデンボッシュ

「矢原の部屋」 Vol. 16

専務理事 矢原 芳博

みなさんこんにちは、皆様のお悩み相談窓口「矢原の部屋」です。豚事協の新たな27期が5月1日からスタートしております。今期も7月24日の通常総会を皮切りに、支部セミナー等様々な催しを検討しておりますので、どうか奮ってご参加お願いいたします。なお、事務局からのお知らせ等でご連絡させていただいていますが、世の中の流れに逆らえずに、豚事協が扱う共同購入資材についても、この春値上げをせざるを得ず、皆様には諸物価高騰の折、まことに申し訳ございませんが、ご理解、ご協力の程何卒よろしくお願いいたします。

養豚国際フォーラム2026に参加しました！

今年3月16、17日の2日間、福岡県福岡市において、7年ぶりの養豚国際フォーラムが開催されました。豚事協では過去からこのフォーラムの際にはブースを出展させていただき、豚事協で共同購入いただける様々な資材を、供給元である各社様と一緒にご紹介してきました。今回も主催者をお願いをして、大きめのブースを確保して、2日間参加させていただきました。約360名(うち生産者約150名)と大勢の方々が参加され、会場は熱気に包まれておりました。我々のブースにも大変たくさんの方々にご参集いただき、組合員様にも、まだ組合員になっていない方にも豚事協の事をお伝えする良い機会になりました。今回のフォーラムのテーマはグループシステムを用いた日本養豚のシステム転換がテーマでした。いわゆるスリーセブン方式、フォーファイブ、ファイブフォーなどのグループシステムは、経口合成黄体ホルモンによる発情同期化のテクニックが一般化して、数週間に1回の分娩同期が精度高く実現できるようになっており、グループシステムへの移行がかなり平易に行える状況になっている事に感動しました。ここまでのシステムに育て上げて来られた先生方には感謝いたします。そしてさらに繁殖、肥育の分離生産システム(米国のパイプストーン社やカーテージベテリナリーサービス社が立ち上げた家族経営の生

産者が投資するシステムで、私は勝手にパイプストーン方式と呼んでいます。)につながる話も出ており、こちらも今後日本国内でも取り組みが進むことが期待されます。いわゆるパイプストーン方式には、グループシステムが必須という訳ではないのですが、いずれのシステムも高性能種豚がどんどん国内の種豚シェアを増やして、母豚1頭当たりの生産成績が欧米トップレベルに近づきつつある中で、収益力の足かせとなっている労働生産性や設備コストの高騰への対策として一石を投じうる方法ですので今後の発展には期待したいところです。

豚熱の選択的殺処分について

2018年以降、残念ながら国内では豚熱の発生が継続しており、すでに103例の発生例が報告され、基本的にはそのすべての豚が全頭殺処分となっています。野生イノシシへの感染が北海道以外の全国に広がってしまった現状においては、長い年月を想定した清浄化への取り組みに、じっくりと向き合わねばなりません。豚にワクチン接種が行き渡っている地域においては、発生農場においても、繁殖豚を始め、症状を示さない肉豚等は殺処分しなくても、周囲の農場への拡散のリスクは極めて少ない、という知見が積み上がってきております。これを受けて豚熱発生農場における選択的殺処分に向けた家畜伝染病予防法の改正の手続きが進捗しています。すでに閣議決定され、国会での議論がこれから始まると考えられます。詳しい実施上の規定についてはここでは省略しますが、この動きも、現在養豚生産現場で課題となっている事柄について、科学的根拠を基に、前に進める力強い動きとして歓迎される話であると感じています。グループシステム、分離生産方式、豚熱の選択的殺処分、いずれもチャレンジが始まると様々な問題が起きてくるかもしれませんが、未来のあるべき姿に向かって一歩踏み出すことが大事だと思います。

以上

豚事協共同購入資材のご案内

ゆめアミノ

本体価格：

1袋20kg 19,200円（送料込、税抜）
（21,120円（送料込み、税込み））

○主な使用方法

母豚育成期：

アミノ酸の不足に応じて添加、

20～40g/頭・日または1～2%添加

母豚妊娠期：

特に初産、2産時にアミノ酸の不足

に応じて添加、20～40g/頭・日

または1～2%添加

母豚授乳期：

例えば、ゆめ種豚78の1kg分相応で

当製品を80g/頭・日 添加で相応

発送元：あすかアニマルヘルス



豚事協の第27期行事

理事会

第 1 3 3 回	令和 8 年 6 月 11 日 (木) (東京)
第 1 3 4 回	令和 8 年 7 月 24 日 (金) (東京)
第 1 3 5 回	令和 8 年 9 月 10 日 (木) (東京)
第 1 3 6 回	令和 8 年 12 月 10 日 (木) (東京)
第 1 3 7 回	令和 9 年 3 月 11 日 (木) (東京)

(その他)

海外視察研修	令和 8 年 6 月 2 日～9 日 (アメリカ)
第 5 回若者が夢を語る会	令和 8 年 8 月 20 日～21 日 (東京)

なお、第26回通常総会は令和 8 年 7 月 24 日 (金) 大手町サンケイプラザにて開催予定です。27期の行事予定、総会詳細は次号にてご案内いたします。

編集後記

* * *

皆様はどんな趣味をお持ちでしょうか？私のここ数年の趣味はなんといってもサウナです。3月16、17日に開催された養豚国際フォーラムにおいて、サウナ好き養豚経営者の方（千葉県在住の某K社様）と養豚サウナ部（仮）を立ち上げる話が盛り上がりました。K氏はサウナに入り本場フィンランドまで今年いかれるという生粋のサウナー（サウナ好きの人の呼び名）です。そんな彼もおすすめするサウナが大分県久住高原にある、寒の地獄温泉サウナです。私も一度だけ行ったことがありますが、もともとは阿蘇の中腹にある冷たい温泉に入る湯治をするという変わった場所でした。私も冬にうかがいましたが、水はとて冷たく、外気温も0℃ととても寒かったです。その湯治を現代版にアレンジしたのが、その冷泉のすぐ横にサウナを作り、サウナで温まってから水風呂として冷泉に入るというものです。そのサウナ室が大きな薪ストーブで加熱しており、サウナに慣れた自分でもかなり熱い空間なのですが、薪サウナの特長でもあります、空気は流れており圧迫感がありません。それはガンガン燃焼する薪ストーブに新鮮な空気を送り込むこと、そして一酸化炭素中毒にならないようにサウナ室とは思えない喚起の対流になっていることからです。よくサウナが苦手な方がサウナ室のあもあとした圧迫感のあるサウナ室の特徴をあげられます。そんな人にこそおすすめなのが、薪サウナです。サウナは薪になり時代が変わったというほど別物になっております。私のイチオシは地元の茨城県日立市にある3UN (<https://3un-sauna.com>) という薪サウナ施設です。ウイスキングという北欧のリトニアを中心に行われる植物療法（白樺や樺の葉を主に利用）を採用しており、植物の力で信じられないほど芯まであたたまります。サウナに興味がある方加藤までメールください。養豚業界で面白い企画をしています。加藤アドレス (kato@tonjikyo.or.jp)